

田代売薬

田代のくすり産業の礎

久光製薬発祥の地である佐賀県鳥栖市東部は、地名を田代^{たじろ}と言い、對馬藩^{つしま}（現在の長崎県對馬）の飛地^{とびち}でした。1万3000ほどのわずかな石高でしたが、富山・大和（奈良県）・近江（滋賀県）と並び、〃田代売薬、として配置売薬業が発達しました。「小松屋」と称していた久光製薬の前身は、弘化4年（1847年）、田代売薬の一業者として久光仁平（初代）によって創業しました。

配置売薬



大正時代のくすり屋さん
（配置薬販売員）

配置売薬は、販売先である個人宅を訪問して薬を預け、その半年から一年後に再び訪問して使われた薬の料金のみを集金するというくみで、日本独特のものとなっています。後から利益を得るという商法であったことから、「先用後利^{せんようごり}」と呼ばれていました。

今でこそどのような僻地にも医療施設がありますが、国内経済が成長し始める1960年代までは家庭の常備薬が治療の第一手段で、配置薬の存在はたいへん大きなものでした。

先用後利という商売方法に加え、配置売薬業が元祖ではと考えられるものに〃おまけ商法、があります。得意先に子どもがいれば紙風船、家事を切り盛りするお母さんには玉杓子^{たまじやくし}、また、上得意であれば歌舞伎役者

や名所などが描かれた錦絵を土産に訪問しました。年の暮れの挨拶として暦（現在のカレンダー）も配っていました。家族の誰も見つる場所に、それも一年間使ってもらうことで、暦は主力商品や屋号（事業の名前）を覚えてもらう広告としての役割もありました。

このような行商をする人々は「くすり屋さん」と呼ばれ、訪問先ではとても慕われていました。くすり屋さんは相談役となることもあり、時には縁談をまとめることもあったそうです。庶民が旅する機会が多くなかった江戸時代、くすり屋さんは、人々に情報や文化を運ぶ役割も担っていたと言っても過言ではありませんでした。



配置売薬は柳行李（やなぎごうり）に入れて運びました

田代売薬の発祥説

對馬藩田代領で、配置売薬が発達した理由には、いくつかの要因があります。第一には、交通の要衝であったこと。田代は長崎から小倉へと続く長崎街道沿いに位置し、熊本や鹿児島へと続く薩摩街道ともつながっています。人の往来が盛んであったことから宿場町としても栄え、いろんな地域からの物、情報が集まりました。また、藩主在住の領地に比べ、飛地であったことから領民への統制が比較的緩かったのも影響したと言われています。

さらに、富山、大和、近江の売薬と異なり、主力商品を「貼り薬」に特化させたことも発展の要因として挙げられます。「貼り薬」の生産に重点を置いたことが、その後、佐賀県鳥栖市を〃貼り薬の町、へと発展させました。田代売薬の一業者として創業した小松屋も、このような流れの中で成長し今日の久光製薬となっています。



鳥栖市田代上町 八坂神社にある案内板（長崎街道田代宿）



旧街道と田代宿の位置

明治時代の配置売薬

明治元年（1868年）、日本政府はあらゆる分野で西洋近代化の模索を始めます。それは、医薬分野でも例外ではありませんでした。配置売薬業は政府の規制下に置かれ、「売薬規則（1877年）」により、売薬業者には営業税、鑑札料（配置薬を販売するための免許料）の支払いが義務付けられました。

次いで、明治15年（1882年）の売薬印紙税により、定価の一角の印紙税が課せられるとともに、製薬を主とする売薬営業者、製薬せずに販売のみの請売業者、得意先を回ってくすりを配置する売薬人の区分が明確化され、配置売薬業者にとって厳しいものとなりました。

奇神丹[®]と朝日万金膏[®]

政府の西洋化に伴って薬業界の過当競争、業績不振が激化する中、小松屋の久光与市（2代目）は、屋号を久光常英堂と改め（1871年）「奇神丹[®]」を生み出します。この商品は、日清戦争に出兵する軍人に販売したのを機に、軍用薬に指定されました。日露戦争でも使われたとされています。

さらに、明治36年（1903年）、久光三郎（3代目、後に中富三郎）が久光兄弟会社として法人化し、「奇神丹[®]」を関西地方の卸問屋にも販売するようになりました。また、和紙にくすりを延ばした延べ膏薬「朝日万金膏[®]」を作り出します。

明治末期には機械（ロール式展膏機）の導入での「朝日万金膏[®]」の大量生産が始まり、販売網は全国へと広がっていきました。



奇神丹[®]

朝日万金膏[®]

朝日万金膏[®]からサロンパス[®]へ

販路が拡大し全国の商品となっていた「朝日万金膏[®]」には、二つの問題点がありました。薬剤の臭いと肌にのこる黒い貼り跡。その欠点を改良すべく研究に着手し、昭和9年（1934年）に清潔な白色でさわやかな匂いの「サロンパス[®]」が開発されました。79年経った今日に至るまで、ロングセラー商品として多くの方々に使われています。

對馬藩の飛地である田代に発達した田代売薬は、佐賀県の三大産業の一つである製薬業として、その礎を築いた人々の精神を引き継ぎ今日も脈々と続いています。



昭和9年、サロンパス[®]誕生時のパッケージ